平成 21 年 5 月期

横浜市感染症発生動向調査委員会報告

平成 21 年 5 月 28 日
横浜市健康福祉局健康安全課
TEL045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症･疫学情報課
TEL045(754)9816

≪今月のトピックス≫

- **季節性インフルエンザとしては、市内では B 型及び AH3(香港型)の検出がわずかにみられています。**
- **伝染性紅斑が例年よりやや高めの水準です。**

平成 21 年 4 月 20 日から 5 月 24 日まで（平成 21 年第 17 週から第 21 週まで。ただし、性感染症については平成 21 年 4 月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

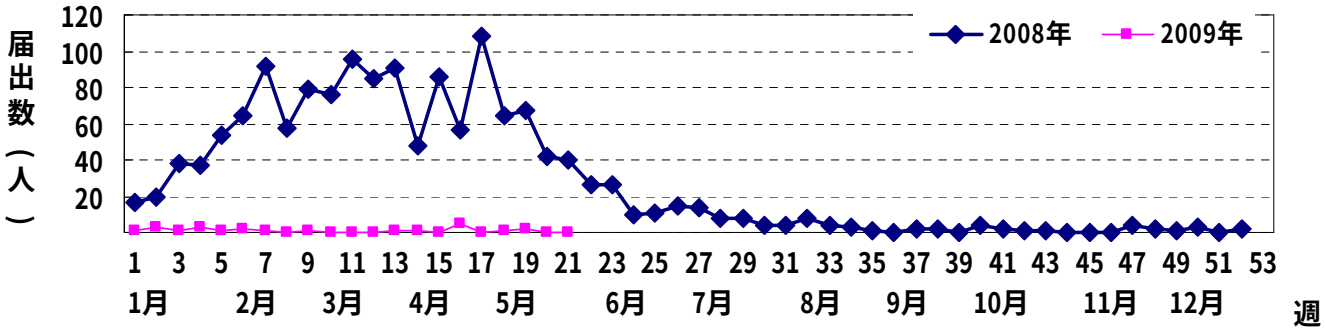
平成 21 年　週－月日対照表

第 17 週	4 月 20～26 日
第 18 週	4 月 27 日～5 月 3 日
第 19 週	5 月 4～10 日
第 20 週	5 月 11～17 日
第 21 週	5 月 18～24 日

全数把握の対象

1　**麻しん**：2008 年から感染症法における 5 類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。（国立感染症研究所ホームページ http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html）
2009 年 5 月は 27 日現在で 3 例の報告があり、3 例とも予防接種を 1 回受けていました。

週別届出数の推移



ひと月で100例以上の報告があった2008年に比べてかなり少なくなっていますが、未だ患者発生がありますので、予防接種を 1 回受けていても、麻しんにかかっていない方は予防接種を生涯 2 回受けることが大切です。

2012 年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

《日本は、2008年～2012年の 5 年間で、麻しん排除を目指します》

① 風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握
② 1 歳および就学前 1 年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる 2 回接種の徹底
③ 5 年間に限り、中 1 及び高 3 相当の年齢の者への定期接種を実施

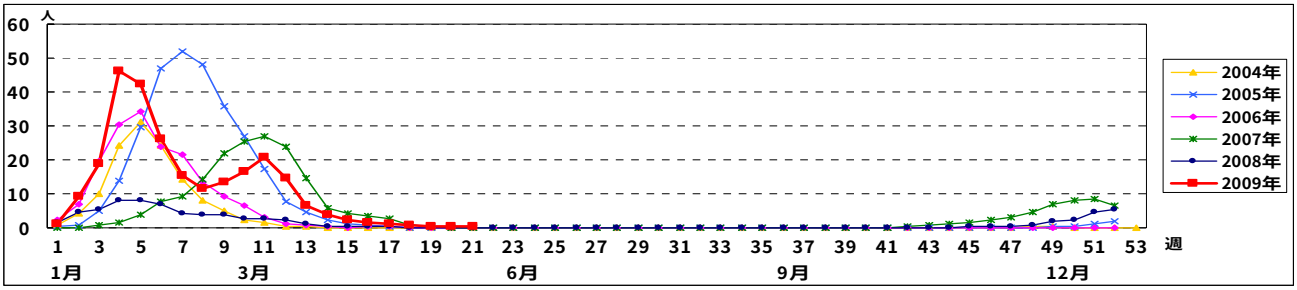
2　**腸管出血性大腸菌感染症**：5 月の報告数は、27 日現在で 4 例です。今年に入って 13 例の報告があり、血清型の内訳は O157 が 8 例、O26 が 2 例、O111 が 1 例、O145 が 1 例、不明が 1 例で、性別の内訳は、男性 11 例、女性 2 例で、年齢の内訳は、10 歳未満が 3 例、10 代が 6 例、30 代が 2 例、40 代が 2 例と、10 代がもっとも多くなっています。毎年、夏に報告が多くなりますので、注意が必要です。例年レバ刺し生食による感染が見られます。

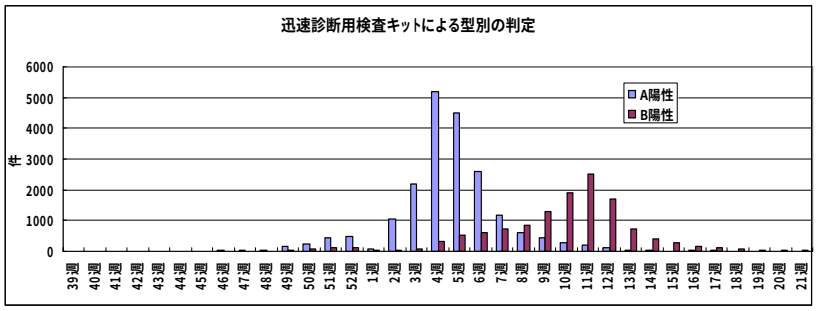
啓発用チラシ「O157 に注意しましょう」 http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf

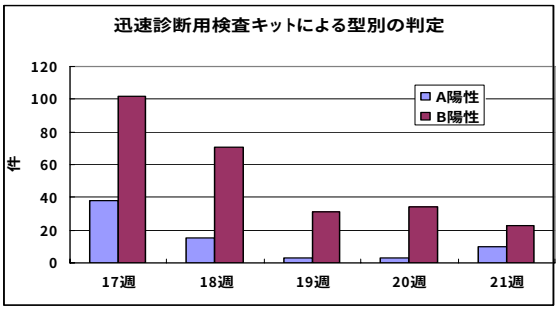
定点把握の対象

1　**インフルエンザ**：今シーズンは、過去5年間で最も流行開始が早かった昨シーズンに次いで早く、2008年第49週に流行の目やすとなる「定点あたり報告数1.0」を超え、2009年第4週に流行のピークとなりましたが、第9週から再び増加に転じ、第11週にもピークとなり、二峰性となりました。迅速診断用検査キットによる型別の集計から、第一のピークはインフルエンザA型、第二のピークはインフルエンザB型が流行が中心である可能性が推察されました。第21週は定点あたり報告数は0.32となりました。行政区別では、磯子区(1.43)、神奈川区(1.14)の順で多く報告されています。川崎市は0.26、神奈川県（横浜、川崎除く）は1.17、全国は1.25でした。

迅速診断用検査キットによる型別の集計では、第4週をピークに減少し第21週にはA型11件、B型23件の報告です。迅速診断検査数に占める陽性率は66%をピークに5%以下に減少しています。







また、今シーズンのインフルエンザA型ではAH1(ソ連型）が優位でしたが、4月28日以降に新型インフルエンザに関連して行った発熱外来等の検体からの季節性インフルエンザウイルスの検出数の内訳は AH1(ソ連型）2 件、AH3（香港型）61件となっています。

2　**A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**：昨年は、過去 5 年間で最も高い水準で推移していました。今年に入ってからは例年並みの水準ですが、第21週は2.51と増加傾向にありますので、注意が必要です。行政区別では港北区(7.71)が高く、次いで保土ヶ谷区(6.25)、瀬谷区(5.75)となっています。川崎市は 2.64、神奈川県（横浜、川崎除く）は 1.77、全国は2.3でした。

3　**感染性胃腸炎**：昨年は、第43週から増加の兆しが見られ、第51週の定点あたり報告数は18.51と、今シーズンで最も高い値となりました。その後減少し、2009年第21週は4.66となりました。集団感染の報告はほとんどなくなりました。行政区別では瀬谷区(12.0)、港北区(7.14)、南区(7.0)が高くなっています。川崎市は 7.12、神奈川県（横浜、川崎除く）は5.67、全国は6.81と、いずれも横浜市より高い値です。

4　**伝染性紅斑**：例年並みの水準で推移していましたが、第13週から増加し、第21週は定点あたり1.06と、例年より高めの水準となっています。川崎市は2.27でした。全国では、過去5年間の同時期と比較して低い水準で推移していて、第21週は定点あたり0.21でした。例年、6月頃が一番高いようですので、今後の動向には注意が必要です。

5　**性感染症**：性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科･皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

4 月は、3 月に比べて全体としては横ばいですが、性器クラミジア感染症は男性がやや増加し、女性がやや減少しています。19歳以下の若年層については、男性は性器クラミジア感染症が2例、淋菌感染症が1例、女性は性器クラミジア感染症が2例でした。

この感染症発生動向調査委員会報告とデータの詳細については、下記のホームページに掲載されていますので、他の記事と合わせてご覧ください。
横浜市衛生研究所ホームページアドレス　URL:http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/